

底魚資源調査（夏季）を実施しました

水産試験場では、本県沖の主要な底魚類の資源動向を把握するため、平成15年から調査船いばらき丸(179t)により年2回（夏季、冬季）の着底トロール調査（オッタートロール）を実施しています。本調査では、本県沖の水深75～450mまでの海域、合計29定点において、15～30分間（速力3～4ノット）網を曳き、面積密度法により本県海域の現存量を推定しています。今回は令和6年7～8月に実施した夏季調査結果についてお知らせします。

1 主要な底魚類の推定現存量の推移

平成26年度から今年度までの現存量の推定結果を表1に示しました。また、参考として、県で資源評価を行っている魚種については資源水準も記しました。直近5年間の推定現存量の推移を元に、漁獲対象種の推定現存量の増減傾向（以下、増減傾向という）を判定した結果、増加傾向にあるのはヤナギダコ（水だこ）、アオメエソ（めひかり）、アカムツ、ユメカサゴ（のどぐろ）の4種、横ばい傾向にあるのはヤナギムシガレイ、ババガレイ（なめた）、ムシガレイ、チゴダラ（どんこ）、など8種、減少傾向にあるのはアカガレイ（赤がれい）、マコガレイ（本まこ）、キチジ（あかじ）、マアナゴの4種でした。その他、漁獲対象とはなっていないトラザメ（ねこざめ）並びにテナガダラ（とうじん）は減少傾向でした。

表1 推定現存量の推移（夏季トロール調査）

（単位：トン）

魚種/年度	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	増減傾向	水準※	過去10年平均
ヤナギムシガレイ	48	52	127	71	64	45	27	23	28	48	13	横ばい	中位	53
ババガレイ(なめた)	71	53	96	79	70	49	25	17	52	77	27	横ばい	低位	59
アカガレイ(赤がれい)	5	5	109	29	10	1	2	1	0	1	0	減少	-	16
マコガレイ(本まこ)	5	16	29	26	19	50	14	18	5	6	0	減少	低位	19
マガレイ(沖まこ)	11	30	62	77	1	0	1	0	0	0	0	横ばい	低位	18
ムシガレイ	17	31	135	155	92	152	115	228	143	245	95	横ばい	高位	131
ミギガレイ(にくもち)	107	65	162	111	105	85	36	46	77	53	37	横ばい	-	85
ヤナギダコ(水だこ)	213	250	199	217	270	111	68	77	57	244	120	増加	低位	171
アオメエソ(めひかり)	69	48	312	193	260	57	110	160	191	585	463	増加	高位	198
チゴダラ(どんこ)	173	156	387	242	151	157	130	223	80	227	99	横ばい	-	193
マダラ	179	144	142	16	56	3	4	0	2	15	1	横ばい	-	56
アカムツ	25	21	22	23	14	24	15	13	13	23	19	増加	-	19
ユメカサゴ(のどぐろ)	29	26	32	111	189	78	30	37	70	79	98	増加	高位	68
キチジ(あかじ)	10	34	46	35	8	2	23	9	4	23	2	減少	高位	19
マアナゴ	49	34	48	31	35	19	26	20	7	23	4	減少	低位	29
マトウダイ	27	24	70	34	5	29	17	18	20	33	7	横ばい	-	28
参考														
トラザメ(ねこざめ)	777	1,119	960	1,603	1,231	1,629	1,027	1,077	385	290	197	減少	-	1,010
テナガダラ(とうじん)	1,389	6,559	1,126	907	1,113	2,116	340	1,210	1,937	507	157	減少	-	1,720

※「茨城県産重要魚種の生態と資源」(令和6年3月更新、水試ホームページ)で報告している資源水準。-は未評価。

表2 今年度と昨年度の増減傾向の比較

2 今年度と昨年度調査結果の比較

今年度と昨年度（令和5年度）の調査時に行った増減傾向の判定結果の比較を表2に示しました。漁獲対象種の増減傾向を比較した結果、アカムツは横ばいから増加傾向に転じましたが、ヤナギムシガレイ、ババガレイ（なめた）、ムシガレイ、マダラ、マトウダイは増加傾向から横ばいになり、キチジ（あかじ）、マアナゴでは横ばいから減少傾向になりました。昨年度は一昨年度に比べて増加を示す魚種が増えましたが、今年度は再び横ばいや減少を示す魚種が多くなりました。

これらの増減要因について解明していくため、水産試験場では今後とも資源動向のモニタリングを継続していくとともに、資源の持続的な利用に向けての取組を実施していきます。

魚種/年度	R5傾向	R6傾向
ヤナギムシガレイ	増加	横ばい
ババガレイ(なめた)	増加	横ばい
アカガレイ(赤がれい)	減少	減少
マコガレイ(本まこ)	減少	減少
マガレイ(沖まこ)	減少	横ばい
ムシガレイ	増加	横ばい
ミギガレイ(にくもち)	横ばい	横ばい
ヤナギダコ(水だこ)	増加	増加
アオメエソ(めひかり)	増加	増加
チゴダラ(どんこ)	横ばい	横ばい
マダラ	増加	横ばい
アカムツ	横ばい	増加
ユメカサゴ(のどぐろ)	増加	増加
キチジ(あかじ)	横ばい	減少
マアナゴ	横ばい	減少
マトウダイ	増加	横ばい
増加合計	8	4
横ばい合計	5	8
減少合計	3	4

### 3 アオメエソ（めひかり）の漁獲量と体長組成について

今回の調査結果から、アオメエソの資源量が増加傾向にあることを示しましたが、この傾向は漁獲量にも表れています（図1）。本県における底曳網の魚種別漁獲量（沖合底曳網及び小型底曳網5トン以上の計）では、平成23年から令和3年まではヤリイカが第1位となっていました。令和4年以降はアオメエソが1位となっています（図2）。このように、本県におけるアオメエソの重要性は高まっています。

一方で、アオメエソの生態はよくわかっていません。図3に令和5年7月から令和6年8月における調査船調査によるアオメエソの体長組成を示しました。11月頃に体長5cm程度の小型魚が加入し、7月から翌年6月にかけて8~12cmほどに成長した後、9月にかけて13cm前後の大型魚として漁獲されますが、10月以降は急に小さくなります。これは親魚が産卵場へと回遊するためといわれることもありますが、成熟が進んだアオメエソの親魚は天然海域で見つかっておらず、詳細は不明です。

体長組成を見てわかるとおり、本県で漁獲されるアオメエソは本県沖で成長しながら漁獲されています。価値の高い大型魚を利用するためには、小型魚が漁獲される海域での操業を控えるなど、小型魚を保護することが重要です。  
（定着性資源部 多賀・綿引）

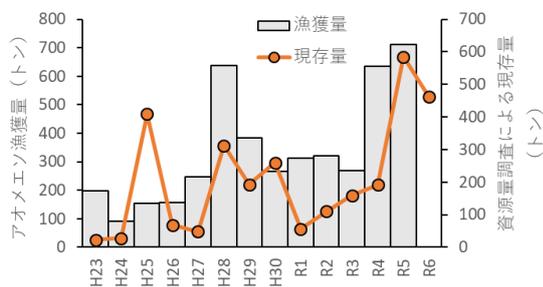
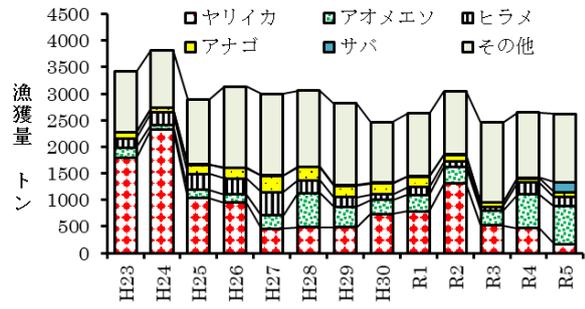
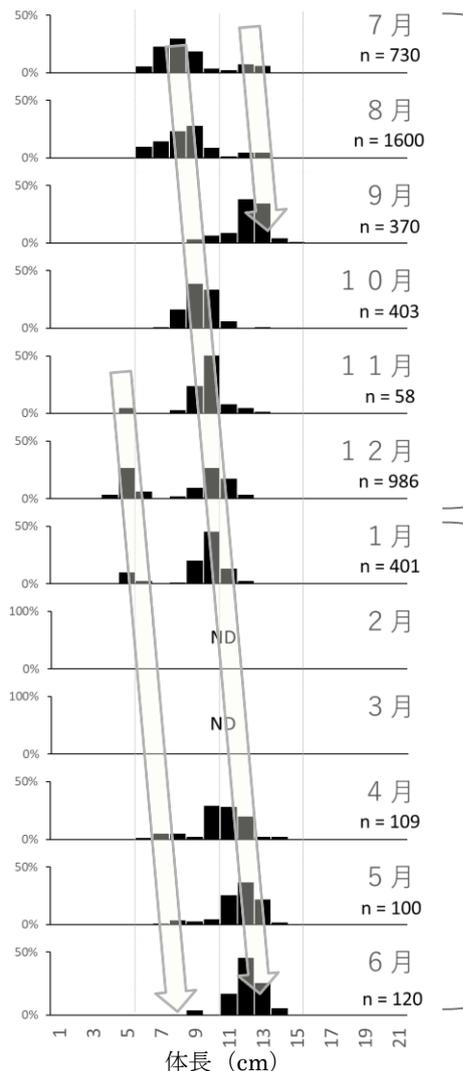


図1 本県におけるアオメエソの漁獲量と現存量



漁期年（9月～翌6月）

図2 底曳網による魚種別漁獲量



令和5年

令和6年

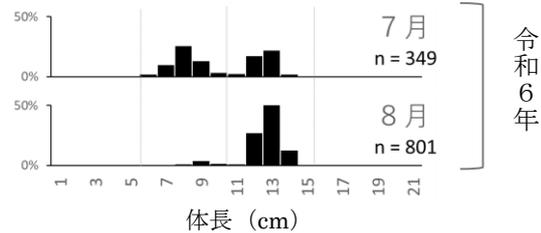


図3 調査船いばらき丸で漁獲されたアオメエソの体長組成

**【次回予告】**

令和6年10月11日発行の水産の窓は「令和6年10月の海況と今後の予測」を予定しています。